

特集

天文教育とアストロツーリズムの垣根を越えて

～鹿児島県与論島における星文化普及の取り組み～

澤田幸輝（和歌山大学大学院観光学研究科）、

北尾浩一（星の伝承研究室）、尾久土正己（和歌山大学観光学部）

1. はじめに

「うちは教育施設、観光施設じゃない。」

プラネタリウムや公開天文台職員からお話を伺う際、悲しい哉、しばしば上記の言説を耳にする。そこには、「教育」を美徳なものとして称揚する一方で、「観光」を野暮なものとして把握する、天文教育業界独特の意識が看取される。「教育」と「観光」の間には、分ち難い境界線が引かれているのである。

確かに観光は、社会に負のインパクトを与える側面がある。観光開発による環境破壊、オーバーツーリズムによる物価上昇や交通渋滞など、例を挙げると限りがない。ただこれらの批判は、観光を「現象」単位で捉えたもので、観光を享受する「個人」に焦点を当てたものではない。教育旅行でプラネタリウムを訪れると「高尚」な行為に、翻って観光で同館を訪れると「低俗」な行為に転位するということは、決してないはずである。すなわち、教育と観光というのは、その根幹で深く結びついた事項として把握すべきなのである。

本報では、筆頭著者が専門とする観光研究の視点から、教育と観光の関係性を簡単に整理した上で、著者らが鹿児島県与論島で実践している取り組みを紹介する[1]。

2. 天文教育とアストロツーリズム

2.1 「観光＝低俗」は時代遅れ

観光研究の文脈でも、観光を俗物として扱った文献は幾つかある。

Boorstin は、骨折り行為 (travail) である「旅行」と対比する思索で、観光を把握する。彼は、危険と隣り合わせであった「旅行者」

は、常に能動的で多くの経験を欲していたが、何らの困難に直面しない「観光客」は、受け身の態度で楽しみに興じていることから、ここでの経験も「空虚で」、「無意味なもの」に成らざるを得ないことを指摘している[2]。

同様の指摘は、民俗学者の宮本常一によってもなされている[3]。彼は、「観光旅行」を、豪華な観光旅館に宿泊して開放気分にする「豪華旅行」と、参拝旅行に属される「貧乏旅行」の2つに区分した上で、後者が、「健全な旅行」であると論じている。「若いときから貧乏旅行をつづけてきた私はいわゆる観光を自的とした旅はほとんどしたことがなかった(傍点は筆頭著者による)」との記述から看取できる通り、労苦の伴う「貧乏旅行」こそが理想であって、彼の言う観光は忌避すべき対象だったのである。

Boorstin と宮本の指摘は、論述に若干の差異があるにせよ、観光を低俗なものとして捉えている点では共通している。他方で、かかる彼らの偏向的な行論は、その執筆時期に照合すると致し方ない部分がある。

1960年代、70年代における「旧い観光」形態は、旅行会社によって催行される団体旅行が主流であったが、そこでは、組織化され、均質化されたパッケージツアーが提供されていた。均質化された空間の中で同じものを見、管理された時間の中で食事を楽しむという現象が、彼らの言う観光だったのである。

本報で問題としたいのは、天文教育業界にとっての観光イメージが、上記の「旧い観光」と同義のものとして映じていないか、という

点にある。彼らの文献が発表されてから約半世紀が経った現代の観光は、余暇時間の増大で個人旅行が一般化したほか、バーチャル映像をはじめとする情報技術の発達によって、観光の基盤であった「ホーム／アウェー」の境界が融解しつつある[4]。現行の観光研究においても、日常性と非日常性、固定性と移動性などの二元論を超越した議論が、活発になっている[5]。つまり、「観光／旅行」、「豪華旅行／貧乏旅行」という二項対立は、現代観光においてはもはや消滅し、そこに付随していた「低俗／高尚」の言説も瓦解しているのである。観光を低俗なものとして捉えるのは、些か時代遅れの議論なのである。

「観光施設じゃない」という言説の裏側には、「古い観光」イメージの残滓が存しているのではないかと、本報では投げかけたい。

2.2 観光客は「創造」主体

先述の通り、近年の観光形態は、「古い観光」で所与とされてきた幾つかの対立軸を脱構築している。震災復興の場で救援活動を行うボランティア・ツーリズムや、戦争遺産群をめぐるダークツーリズムは、その典型である。そこには、当該事象に対して、能動的な働きかけをせんとする観光客像が浮かび上がる。

かかる動向を、労働と余暇の関係性から議論したのが、山田である。彼は、観光客を、対自的な合目的関係運動を繰り返す主体的存在と規定し、観光が、「鑑賞・創造・交流活動」の伴う現象であることを指摘する[6]。また山口ほかは、個々観光客の人間性は、あらゆる観光経験を通して「螺旋」的に昇華することを指摘した上で、かかる観光体験に伴う創造性が、現代社会に正の効果をもたらしていることを示唆している[7]。

抽象論に傾倒せずとも、何らの感動を喚起しない観光が絶対に存し得ないことは、経験

的に理解できるのではないか。たとい満足度の低い観光体験であったにせよ、そこには幾許かの経験や思い出が創発され、それらが観光客個人に蓄積されるはずである。創造活動が伴わない行為は、観光でない。観光は、本質的に、個々人の内外面に、それまでになかった新たなものが創り出す現象なのである。こうした理解を以て、本報では、観光客を「創造」主体と捉えている。

かかる立場で見れば、教育と観光が、同根の事項であることが理解できよう。語意的に見れば、教育と観光というのは、働きかけの対象が他者と自己で異なるが、創造性を希求している点では同じである。観光の現場でなされているのは、一種の生涯教育なのである。

柳田國男は、旅行の第一義は、読書と同義であると指摘する[8]。そう、観光は、「学問のうち」なのである。

3. 与論島における星文化普及の取り組み

2 節の議論を踏まえ、和歌山大学観光学部では、鹿児島県与論島をフィールドに、星空を観光資源に据えた持続可能な観光開発に取り組んでいる[9]。

著者らが実践している取り組みの 1 つに、星空ガイドの養成を企図した「星空案内人資格認定講座」の実施がある。当該認定講座には、「星の文化に親しむ」という講座科目が設定されており、地域の星文化を講義内に組み込むことが許可されている[10]。かかる点に鑑み、与論島独自の星文化を当該講座に組み込むこと、およびアストロツーリズムを通じた地域文化の継承を進めるべく、共著者の北尾浩一氏とともに、「天文民俗学」の現地調査を催行した。

調査当初、著者らは、1970年代から観光地化が進んでいる与論島には、もはや天文にまつわる諸文化は残っていないだろうと考えていた。しかし、かかる予想に反して、非常に

多くの語りを蒐集できた。ここではその一部を紹介したい[11]。

古里出身の原田村元さん(昭和9年生)は、6月終りの夜半12時くらいに上ってくる、8個くらいに固まった、人間の足の形に似た星「ブリブシ」と、その2時間後に、ブリブシの右下辺りから縦に3つ並んで上ってくる星「ミチブシ」について語ってくれた。かかる特徴より、前者がプレアデス星団、後者がオリオン座三つ星であることは相違ない。原田さんによると、ブリブシが上ってくる時に、イカやカジキなどの食いつきが良くなるという。プレアデスの出と魚の騒ぎを結び付ける語りは、内地の一部には存するものだが[12]、奄美・琉球では管見されないもので、非常に貴重な語りであった。

那間出身の市村元登さん(昭和8年生)は、三線に合わせて、「ティンヌブリブシヤ ミナガウイドゥティラース フガニミチブシヤ サヨサ ワウイドゥーティラース ワウイドゥーティユルー」との俚謡を唄ってくれた(図1)。「ティンヌブリブシ」、「フガニミチブシ」が何を指すかは分からないが、「ティンヌブリブシ」はみんなの上が照らす。フガニミチブシは俺1人の上に、俺を照らすちゅう意味(聴き取りママ)」と語ってくれた。市村さんは他にも、北斗七星を、かつての柄杓であるニブ(クバの葉)に見立てる語りをしてくれた。

このように、与論島には、数多くの美しい星文化が残っていることが確認できた。ただその一方で、「オリオン座」や「プレアデス星団」など、西洋星座の名で星文化を語る話者が多かったことも事実であり、文化継承が十全になされていないことも垣間見えた。一刻も早く、現存する星文化を、次の世代に継承することが求められる。

こうした点に顧みて、著者らは、アストロツーリズムを通じた星文化の継承活動を実践している。その第一歩として、2021年3月

13日に、観光事業者向けの「星空ツーリズム推進事業報告会」を実施し、蒐集した星文化の積極的な観光活用を呼びかけた[13]。また同時に、観光開発と文化の真正性の関係を概説した上で、過度なパフォーマンスによる文化活用は避けるよう喚起した。報告会の後、あるガイドさんは、自分で三線を弾いて星の俚謡をガイドしたいと語ってくれた。また、ツアー内で星文化のガイドを実践してみた、と報告してくれた事業者さんもいる。

無論、現状の与論島においては、地域住民や島の子どもたちに向けた文化教育活動の推進が、最も重要である。理科教育の中で星文化を盛り込んだ授業を実践するなど、地域学教育の推進が希求される。他方で、地域住民だけを教育対象に絞り込むことは、却って他の文化継承の可能性を捨象してしまうことになる。

与論島には毎年、約7万人の観光客が訪れている。「創造」主体である彼/彼女らに星文化に触れてもらうことができれば、全国規模での文化継承が可能になるのではないかと。「天文教育/アストロツーリズム」という対立軸を取り扱うことによって、星文化継承の可能性が広がるのではないかと。こうした考えのもと、今後も、与論島での活動を続けていく。



図1 星の俚謡を唄う市村元登さん

4. おわりに

本報では、天文教育業界の意識下に存する「教育/観光」の対立軸を切り崩すことを目

的に、観光研究の視点から、その両者の結節点を模索してきた。そして、そのひとつの切り口として、観光客を「創造」主体として把握することの必要性を提示した。本報はあくまでも、試論的な位置づけである。今後は、より精緻に両者の関係を結実させるための理論構築が求められる。

また、本報で紹介した与論島における取り組みも、まだ緒に就いたばかりである。COVID-19の影響で大きな打撃を受けている同島の観光産業だが、かかる騒動が収束すれば、必ず観光客は戻ってくる。今後も与論島と歩を共にしながら、星文化の継承活動に取り組んでいきたい。

文 献

- [1] アストロツーリズムについては、澤田幸輝・尾久土正己（2021）「国外におけるアストロツーリズム研究の諸論調」、『観光学』, **24** : pp. 21-40. を参照されたい。
- [2] ダニエル・ブーアスティン（1964）『幻影の時代』（星野郁美・後藤和彦 訳），東京創元新社, pp. 89-128.
- [3] 宮本常一（1975）『旅と観光』, 未来社, pp. 75-80.
- [4] ジョン・アーリ & ヨーナス・ラースン（2014）『観光のまなざし 増補改訂版』（加太宏邦 訳），法政大学出版局, pp.35-45.
- [5] 神田孝治（2013）「文化／空間論的転回と観光学」, 観光学評論, **1** (2) : pp. 153-154.
- [6] 山田良治（2021）『観光を科学する』, 晃洋書房, pp. 24-39.
- [7] 山口誠・須永和博・鈴木涼太郎（2021）『観光のレッスン』, 新曜社, pp. 2-25.
- [8] 柳田國男（1976）『青年と学問』, 岩波書店, pp. 51-53.
- [9] 澤田幸輝・尾久土正己（2020）「アストロツーリズムを通じた持続可能なまちづくりの取り組み」, 2020年日本天文教育普及研

究会年会集録 : pp. 263-266.

- [10] 星空案内人資格認定制度運営機構（2020）, 『星空案内人資格認定講座内容要綱』, p. 15.
- [11] 調査結果については、澤田幸輝・北尾浩一・米山龍介・尾久土正己（2021）「与論島における星文化とその観光活用に向けての一考察」. 観光学, **25** : 2021年10月掲載予定. を参照されたい。また、2021年度中に追調査を実施し、より詳細な報告書を作成したいと考えている。
- [12] 北尾浩一（2018）『日本の星名事典』, 原書房, pp. 34-45.
- [13] 奄美新聞（2021年3月15日）「星空を観光資源に」, p. 1.



澤田幸輝



北尾浩一



尾久土正己